

小さな輪各地に増やそう

NPO法人 あいあいねっと 原田佳子理事長

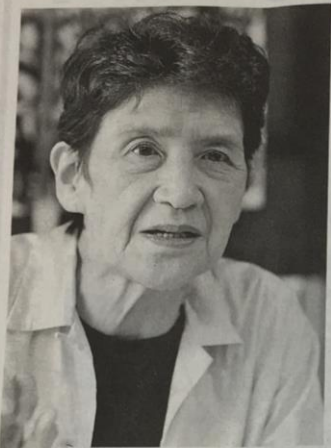


フードバンク

貧困対策として米国で生まれ
たフードバンク。食品メーカーやスーパーが販売しない規格外の食品を引き取り、生活に困っている人たちに無償で提供する非営利事業だ。格差が広がる日本でも存在感を増している。中国地方の先駆者として事業を始めるNPO法人あ
あいねっと(広島市安佐北区の原田佳子理事長(61))に、活動の意義を聞いた。

(聞き手は論説委員・金谷明彦 写真・井上真由)

「日本は米国とは、フードバンクの目的が異なっているように
すね。一方で生活困窮者がいて、もう一方では食べられる物が捨て



られる不条理。両国とも、それを少しでも解消しようとする目的は同じでしょう。

ただ米国は何より貧困対策で、たまたま食品が余ったという無償で提供する非営利事業だ。格差が広がる日本でも存在感を増している。中国地方の先駆者として事業を始めるNPO法人あ

あいねっとは事業を始めて6年になります。

「ああいねっとは事業を始めて6年になります。私たちは地域の高齢者の支援を目的にスタートしました。ただ高齢者に限らず、生活困窮している人が年々増えていると感じています。そうした人たちを助けるフードバンクの役割は、格差社会の中でますます

ついでにと思っています。

「なぜフードバンクを。」

私は医療法人の管理栄養士をしています。高齢の患者さんに栄養指導をする際、家計に余裕がなく十分な食品買えないという人が当時から増え、いまは、いくら私に栄養的な知識があっても何の役にも立ちません。非常に無力感を覚えました。

その時に知ったのがフードバンクという仕組み。必要な食料を提供できるのではないかと、思ったのがきっかけです。

「ああいねっとは、多くの食品メーカーやスーパーが協力していると聞いています。定期、不定期を合わせて、広島県内なら約30社から年間20万程度を提供してもらっています。製造時に包装や容器の印刷が汚れたり、賞味期限が迫りたりして、消費者には売らない商品です。コメをはじめ、雑穀や缶詰など幅広い商品をいただいています。

「農家も野菜を提供しているそうですね。」

「はたまたま、竹原市出身。広島大学大学院社会科学部研究科栄養学専攻を卒業し、前職は管理栄養士。広島市立保健師専門学校長を務めていた。スタッフ約30人のNPO法人ああいねっとは、11月、ひろしまNPO大賞を受賞。

地元の農家さんがたくさんできた、季節の野菜を持ってきてくれます。大変、助かっています。育ちすぎて出荷できないホウレンソウや、曲がったキュウリなどがありますが、とても新鮮でおいしいです。

「集めた食品はどのように配っているのですか。」

「貧困層の人たちをサポートする福祉施設やボランティアグループを通じ、提供しています。そうしたパートナーシップ団体は広島市安佐北区を中心に27あります。

「また提供してもらった食品を活用し、レストランや配食サービスも手掛けています。」

「それ以外にもお店や家庭で、また食べられるのに捨てられる食品が多いようにですね。そうした食品ロスは年間500万〜800万に上ります。一方、全国のフードバンクを合わせても引き取る量は1万トンに及びません。量を比べるなら、フードバンクは大幅な食品ロス削減には直接つながっていないですね。」

「全国的に見ると、フードバンクは徐々に増えています。足元の広島ではどうでしょう。」

「新しくつくりたいと相談を受ければ、実現は至っています。食品を置いておくための拠点を確保するとか、といったハード面の課題があるかといったハード面の課題があります。私たちは地域の人の協力を得て、拠点を見つけていることができましたが、なかなか難しいようです。」

「でも、もっとフードバンクの仲間を増やしたいですね。」

「私たちが活動する安佐北区は高齢化率が25%近く、他の区よりも高いのが特徴です。中区など中心部では違ったニーズがあるでしょう。各地域で事情が異なることを踏まえれば、一つのグループが大きくなるよりも、例えば広島市内の各区にフードバンクができるのが理想です。ノウハウを伝えてほしいと言われれば、いくらでもお教えします。小さな輪が各地に増えればいいと思います。」